

マザリナード文書の公開に先立って—その特性と東京大学コレクションの紹介

一 丸 禎 子

論文要旨

本論は現在進行中の「マザリナード文書の電子化——次世代型コーパスの構築と新しい研究環境に関する総合研究」（平成 22 年度科学研究費補助金：課題番号 22320066）により Web 公開されることになったマザリナード文書の資料解題である。この資料は 17 世紀フランスのフロンドの乱の時期に手書きや印刷で流布された文書である。しかし、膨大なその量により資料体としての活用が困難であった。このたびの Web 公開でマザリナード文書の研究は確実に新たな局面を迎える。そこでこの資料体の特色（とりわけフロンドの乱との関連）と価値、さらに今回データベース化され、コーパスの重要な核となる東京大学コレクションのこれまで全く不明であったその由来と希少性の高い文書について記述する。なお、この文献調査は 2008 年に逝去されたマザリナード研究の第一人者ユベール・キャリエ教授の協力なくしては成し遂げられなかったことをここに記しておく。

キーワード【マザリナード、電子コーパス、17 世紀フランス、フロンドの乱、Hubert Carrier】

はじめに

2008 年度の『人文』7 号にその構想を発表した「マザリナード・プロジェクト」が 2010 年度の科学研究費補助金（課題番号 22320066 「マザリナード文書の電子化——次世代型コーパスの構築と新しい研究環境に関する総合研究」）によりいよいよ実現する運びとなった。2011 年には公開される予定の研究サイトは多様な領域の研究者が自由に参加できるように設計されるはずであり、実験的な学際的研究者コミュニティの創成にもなるだろう。インターネット環境の発達により、領域横断的な研究者の交流は以前に比べて格段に広がった。しかし、それにとまって、研究サイトの構成や知識の集積方法だけでなく、研究者間の交流の方法や情報交換のルール、さらに法的、倫理的な問題への対処など、新しい問題も解決しなければならない。「マザリナード・プロジェクト」は単にデータベースを公開するにとどまらず、こうした従来とはまったく異なる研究環境の問題も同時に視野に入れて分析・考察するプロジェクトに成長した。この発展は、じつは私たちが電子コーパスとして公開しようとしている資料「マザリナード文書」の性質に由来する。なぜなら、この資料体の特性はその量もさることながら、多様性においても他に類をみないものだからである。マザリナード研究に踏み込むということは、この多様性と向き合うことであり、自分の研究領域の外に眼を向けなければ、いずれかならず行き詰まるのは確かだからである。

このたび公開されることが決まった研究サイトでは、東京大学コレクションをデジタル化し、これを核としてデータを蓄積していくことになる。このコレクションに関する日本語の記述は筆者の学位取得論文（「マザリナード文書とは何か——コーパスとしての東京大学コレクション」2006 年東京大学）の他には、まだどのメディアにも発表されていない。ここでマザリナード文書の全般的な特性とあわせて、東京大学コレクションを紹介し、またそこに含まれる 5 つの下位コレクションの特徴と由来を説明することは、本研究の課題となる学際的研究の必然性を理解する上できわめて有効だと思われる。そこで本論でははじめに 17 世紀フランスのルイ大王とフロンドの乱などの歴史的関連事項を加えながら、マザリナード文書の特性と研究資料的価値を考察し、つづいて東京大学コレクションについて記述しつつこの資料体の特徴をより具体的に検証する。

なお、マザリナード文書の定義に関しては、学術的な共通認識はまだ確立していない。研究者間で

は「フロンドの乱に関わる文書である」という点において合意しているものの、フロンドの乱の年代については微妙な意見の対立が残っており、またフロンドの乱の期間に出版された文書に限るのか、あるいはそれ以後に出版されたものでも関連が認められればマザリナード文書と呼ぶのかについては特に意見が大きく分かれるところである。マザリナード研究におけるもっとも新しく、もっとも網羅的な研究を残したユベール・キャリエの定義は、フロンドの乱に期間を限定し、1648年5月13日の高等法院連合裁定以前にマザリナード文書は存在せず、1653年7月31日のボルドーにおける和平以後にも存在しないとしている¹⁾。しかしながら、この定義への反対意見も根強く残っている。なぜなら、フロンドの乱の主要人物であるレ枢機卿 Cardinal de Retz, Jean-François-Paul de Gondi (1613-1679) は、それ以後も文書を出版し続けたからだ。

そもそも「マザリナード」*mazarinade* という名称は、フロンドの乱のときに宰相であったマザラン枢機卿 Cardinal Mazarin, Jules (1602-1661) に由来し、スカロン Paul Scarron (1610-1660) による誹謗文書『ラ・マザリナード』*La Mazarinade* (1651年) が語源であるといわれる。実際にはスカロン以前にもこの言葉は使用されているのだが、いずれにせよ、それらの用例に共通するのはマザランに対する批判的な言動である。このように始まりにおいて、*mazarinade* は「反マザラン文書」を指していた。しかし、本論でも後述するように、今日この名称で指示される文書は反マザランに限らない。フロンドの乱のさなかにおいてもちまたに流通する文書を収集する人々がおり、後世においては投機目的で収集するコレクターも出現し、彼らのもとで言葉の意味がいつそう広く解釈されたことによる。19世紀の辞書では、はっきりと二つの解釈が存在する。ひとつは、エミール・リトレの辞書に見るように、語源に忠実な狭義の解釈「反マザラン」と、19世紀ラールのように、実態によりそい、それ以外の内容も含める広義の解釈である²⁾。これら2つは一般的な *mazarinade* の定義として、今日まで共存している。

私たちの「マザリナード・プロジェクト」では、学術的共通認識を整理するため、これまでに記述された定義をできる限り集積しているところである。本論を読まれた方にも、ぜひこの問題を共有していただきたいと考えている。以下の記述は、その意味で、「何をもってマザリナード文書というか」という原初的な問いに私たちを立ち返らせるものである。

「偉大なるルイ」が誕生する前のフランスの記憶

17世紀フランスの国王ルイ14世といえば、人が思い浮かべるのは、ヴェルサイユ宮殿に君臨する太陽王としての華やかな肖像だろう。いくつかの有名な肖像画では、かつらをつけ、贅を凝らした衣裳に身を包み、王杖をもって立ち、あるいは馬に乗って描かれている。自ら統治し、権力の頂点に鎮座し、太陽のように輝く「偉大なるルイ」である。

ヴェルサイユ宮殿での華やかな生活がこの絶対君主の権力を強化する装置として考え出され、見事に機能したことは、歴史家たちによって明らかにされてきた。あまりに良くできていたために、この装置は同時代人だけでなく、300年以上経った今日も世界の人を魅了する。各国から王の威光に引き寄せられた観光客が集まり、フランス経済を支えている。じっさい、冷静な目をもった歴史家をのぞいては、たくみに作りあげられたこの絶対君主のイメージ戦略を逃れることはむずかしい。肉体が減びてもなお「偉大なるルイ」は生き続けているのである。

しかし、こうして光り輝くルイの背後に、陰で見つからないように息をひそめているもうひとりの幼いルイがいる。わずか5歳で即位したこの王は、10歳になるやならずで王国存亡の危機に直面した。

足掛け6年にもおよぶ内戦、フロンドの乱 la Fronde (1648-1653) である。

高等法院と大貴族が国を混乱におとしめたこの恐ろしい戦乱の記憶——パレ・ロワイヤルに押し寄せる民衆、ひそかに深夜パリを脱出するときの恐怖、血族でもある大貴族たちの反乱、頼みとする宰相の亡命、そして地方の蜂起、国内鎮定のため母とともに馬車で移動する旅——が、ルイにパリを嫌悪させ、狩りの城がある沼沢地にすぎなかったヴェルサイユに広大な宮殿を建造させる。つまりこの途方もない舞台装置を作りあげさせた原動力のひとつは、幼いころの消し難い恐怖の記憶なのである。

ヴェルサイユ宮殿の華々しい輝きは人目をくらませ、過去の忌まわしい記憶は遠ざけられたかに見える。だが、ひそかに戸棚の奥や書斎の引出のなかでは、この内乱の記憶である文書が堆積していった。それらはフロンドの乱の間に出版された文書で、多くの場合は読み捨てにされるような印刷物であり、反古紙にされて消えていく運命にあったが、一部は好事家の間で交換され、時には高値で売買され、生き延びていった。やがて愛書家がコレクションに美しい装丁をほどこし、図書室の棚に保管されるようになる。そして19世紀なかばにセレストン・モローが目録³⁾を作ったことにより、投機の対象となって、一気に価格も高騰し、高価な貴重書としての地位を確立した。

それらは総称して「マザリナード文書」les Mazarinades とフランス語では定冠詞複数をつけて呼ばれ、また、ひとつひとつは不定冠詞をつけて「マザリナード」une mazarinade と呼ばれる。こうしてフロンドの乱の際に出版された5200種余りの印刷物と300種ほどの手書文書が今日まで伝えられている。それらはヴェルサイユ以前の王国の隠蔽されたルイの記憶そのものののだ。

言葉によるフロンド

国王ルイ14世が未成年で、摂政であった王太后アンヌ・ドートリッシュ Anne d'Autriche (1601-1666) と宰相マザランが国を動かしていた時期に、戦費の調達のため必要からたびたび課税が強化されたため、これに対抗する形でまずパリ高等法院が民衆とともに立ち上がった（高等法院のフロンド）。いったんはおさまったものの、今度は地方に勢力を持つ大貴族が王権の強化に反発し、筆頭親王家のコンデ大公 Louis II de Bourbon-Condé (le Grand Condé) (1621-1686) らの逮捕をきっかけに地方での蜂起が拡大し、王国は混乱に陥った（大貴族のフロンド）。1648年から1653年の和平までのこの内戦をフロンドの乱と呼ぶ⁴⁾。この時期に、多くの文書が印刷され、街路で配られたり、張り出されたり、呼び売り人が売り歩き、書店を通じて販売され、あるいはひそかに回覧された。

具体的にこれらの文書にはどのようなものがあるかというと、この名称の由来になった宰相マザランを攻撃する文書ばかりでなく、国王宣言、高等法院の裁決、戦況報告、檄文、建白書、貼り紙、政治批判の戯れ歌、大貴族の手紙、他の文書の注解まで、そこにはありとあらゆる種類の書き物が見いだされる。これらの文書はその意味で、フロンドの乱の際のあらゆる発言の集合である。つまり、まず第一にそれらは「言葉」なのである。

しかしながら、そこで発言されていることを同時代人による歴史的な証言として、もっぱら裁判のそのように「出来事を裏づける」ために参考にしようとするなら、私たちは裏切られる恐れがある。なぜなら、そこには敵方を攻撃する意図や、民衆を扇動する目的の発言もあり、そのために事実が故意にゆがめられている場合もあるからだ。そこで言われていることをもとに、ある歴史的事実の確認を行なおうとすれば、私たちは物事を見誤る危険がある。それでもなお、これらの古文書が歴史的に重要な価値をもつといえるのは、次のような理由による。

マザランを個人攻撃する文書はいうまでもなく、国王の宣言にせよ私的な手紙にせよ、印刷され、

あるいは手書きで回覧されたものは誰かに読ませることを前提としている。これらの文書は読み手に働きかけることを期待されている。印刷術の利用は、それだけ多くの人に影響を及ぼそうとするものだ。マザリナード文書の特殊性は、この「行為」としての側面にある。文字通り言葉を石つぶてのよう
に投げて敵陣営を攻撃するものだったのである⁵⁾。

したがって、もしそこに事実をゆがめる発言が見いだされるならば、不誠実な証人として咎めるよりも、むしろなぜ事実をゆがめるのかということに注目しなければならない。つまり、そうすることによってどのような効果がありえたのか、あるいはどのような効果が期待されたのか。それはどんなふうに誇張し、あるいは反対に矮小化しているのか。どんな単語が使われ、どのような形式で語られたのか。そこには行為と同時に表現の問題も含まれる。これらの文書はまさに武器として投げられた言葉なのである。マザリナード文書は言葉による行為であり、それ自体が言葉によるフロンドなのだ。それゆえに、これらの「言葉＝石つぶて」の解析なくして、フロンドの乱の検証は完了しないのである。

マザリナード文書と世論の形成

言葉を伝達するメディアの発達に関しても、マザリナード文書は重要な手がかりを与えてくれる。

印刷術の発明以来、フランスの歴史において大量の文書が印刷された時期が3回あった。16世紀の宗教戦争、17世紀のフロンドの乱、そして18世紀のフランス革命である。いずれも今日のようなマスメディアが登場する以前のことであり、いかえれば、こうした大量文書の出現によって徐々にマスメディアは整備され、現在のような形になっていくのである。マザリナード文書はフロンドの乱の政治状況だけでなく、当時の出版を支える物理的・制度的環境も明らかにする。そして社会において印刷物が獲得していく影響力をはっきりと示すものなのである。

じっさい、先にも述べたようにフロンドの乱においては、これらの文書＝言葉は「行為」として不特定多数の読み手に働きかける。大勢の人を自分の陣営に引き入れ、反対勢力を弱めようとする。「世論」という単語で名指される以前の、集団的意見の形成に印刷物が用いられているのである。町で呼び売りがばらまき、市場で扇動家が読みあげて配った文書が民衆の蜂起にどれだけ影響したのか、それはこれからの研究によって明らかにされていだろう。フロンドの乱におけるテキストの出版と世論の形成が、およそ150年後のフランス革命にどのような影響を及ぼしているのかも今後の研究課題となろう⁶⁾。

こうして社会と印刷物の関係からマザリナード文書を再考することは、今日の私たち、とりわけインターネットの発達によりコミュニケーション・ツールの急激な変貌に直面している私たちにとって、もう一度、情報と人と社会の関係を理解する助けにもなるはずなのである。

研究を妨げるこの資料体の物理的特性

以上に述べたように、マザリナード文書研究への期待はきわめて大きい、体系的な研究成果を出すにはまず最初乗り越えなければならない障壁がある。それはこの資料体の物理的特性でもあるテキストのおびただしい量である。

19世紀にモローが目録を出版してから、3度補遺を追加したことからもわかるように、現存するマザリナード文書の点数は常に近似値として示すしかない。なぜなら、大量に保存しているパリのマザリーヌ図書館(12,000～12,500点)のほかに、アルスナル図書館、パリ大学付属のサント・ジュヌヴィエーヴ図書館(モローはこのコレクションを中心にパリのマザリナードを調査したようだ)や、

フランス以外ではドイツ、イギリス、アメリカ、ロシア、そしてヴァチカン市国などにも大きなコレクションがあり、さらに個人蔵の大小さまざまなコレクションが存在するからである。

モロー以後の大規模な調査は 20 世紀末のユベール・キャリエまで待たなければならない。知られているかぎりのコレクション、とりわけ 2000 点を超すコレクションは全部精査したというこの調査はマザリナード研究史上初めての全体的な学術調査である。その成果は国家博士論文として発表され、『〈フロンドの乱〉(1648-1653 年)の出版物:マザリナード文書』*La Presse de la Fronde (1648-1653) : Les Mazarinades* (全 2 巻, 1989-1991 年) という表題で刊行された⁷⁾。私たちが前述したような数字(印刷本 5200 種、手書き写本 300 種)を得ることができるのも、この著作のおかげである⁸⁾。

この出版の直前に、クリスチャン・ジュオーが果敢にも挑戦した社会的事例研究は『マザリナード: 言葉によるフロンド』*Mazarinades : la Fronde des mots* として 1985 年に刊行され、その冒頭でジュオーは次のように告白している。「全部(の文書)を完璧に分析しつくすのに、人の一生で足りるかどうか、私には見当もつかない。」⁹⁾ 現在までのところ、この二つの著作につづく研究成果は発表されていない。

つまり、マザリナード文書研究はキャリエとジュオーにより大きく前進し、次の局面を迎えようとしているのだが、そこで足踏みをしている状態にある。そのもっとも大きな原因は、一にも二にも膨大なテキストの量にあるのだ。

マザリナード文書の電子化と公開の意義

だが、1990 年代から急激に発展したインターネット環境はこの問題を解決してくれるはずである。テキストをデジタルデータ化することによって、これまで研究者を立ち往生させていた量の問題を解決することができる。そして検索機能によって、「人の一生で足りるかどうか」とジュオーが嘆いた分析にかかる時間を大幅に短縮することができるだろう。その意味で、インターネット環境こそ、この巨大な資料体にもっとも適した研究環境なのである。

デジタル化の効用は研究者のみが享受するわけではない。画像にせよ、テキスト・データベースにせよ、デジタル化して公開されれば、マザリナード文書を閲覧による劣化から物理的に保護し、貴重な古文書としてより長く保存することにもなる。インターネットで見られるようになったら図書館に来る閲覧者が減るのではないかという(おもに図書館側の)危惧に関しては、マザリナード文書においてはむしろ逆になるだろうと考えられる。なぜなら、より多くの人がこの資料体の存在を知ることによって、そこに豊かな学際的研究の可能性が開けるからである。マザリナード研究はテキストの分析だけではない。物質としての紙、印刷、装丁などの状態を知るにはやはり実物を見る必要がある。Web でマザリナード文書に関心を持った研究者は図書館へ足を運ぶ回数を増やすだろう。しかし、テキスト自体はインターネットで読むようすれば、物理的な検証のために図書館での閲覧回数が増えても、実質的な閲覧時間は減らせる。また、より多くの人に知ってもらえば、図書館の蔵書の価値を高めることにもなり、図書館にとってもけっして悪いことではない。

じっさい、この数年に、各国の国立図書館と民間の Google Books が競合する形で、テキストデータの大規模なデジタル化が進んでいる。それと歩調を合わせるように、人文系の学術研究においても、これまでの成果の蓄積をアーカイヴ化して Web 上に公開したり、分割保管されている古文書を Web 上に再現して共同研究するなど、新しい試みが活発に進んでいる。Web という仮想空間に個別のテーマごとに開かれたサイトを中心にして新たな研究者の共同体が生まれつつあるのは確実である¹⁰⁾。

現在進行中の電子化計画：マザリナード・プロジェクト

こうした研究環境の変化に伴い、数年前から構想され準備されてきたマザリナード文書電子化の計画が、現在、日本で進行中である。これは世界に先駆けて、2000 点を超す一つのコレクションをそっくりまるごと電子化し、これを核として研究サイトを立ち上げ、将来的にはいろいろな図書館に分散したマザリナード文書を Web 上に集合させ全体を見渡せるようにしようという計画である¹¹⁾。

「マザリナード・プロジェクト」と呼ばれるこの計画は、2008 年度に科学研究費補助金（「マザリナード文書の電子化」課題番号 20903010、研究代表者・丸根・学習院大学）を受けて、東京大学コレクションを画像としてデジタル化する作業を完了した。さらに昨年からの複数の大学の共同研究によって、Web 上での公開に向けて着々と準備が進められている。とはいえ時間のかかる作業なので、公開の時期はかなり先に予定されていた。しかし、本年度の科学研究費補助金（「マザリナード文書の電子化——次世代型コーパスの構築と新しい研究環境に関する総合研究」課題番号 22320066、研究代表者・バトリック・レボラル・南山大学）により、当初の予想より早くに一般公開できる見通しになったのである。

はじめの計画ではまず専門の研究者による共同作業によってアーカイブ化を進め、次に研究サイトとしての基盤をつくり、知識の蓄積も管理できるようになってから、学際的な研究の場として研究者に提供し、最後に一般に公開されるはずであった。しかし、補助金によってアーカイブ化に必要な作業を一部業者に委託できたため、私たちは研究の実用に耐えるサイトの構築に集中できるようになった。計画の実現がこうして一気に加速されたので、段階的な公開ではなく、研究者と一般の人に同時に公開するということも可能になったのである。

完成すれば、このサイトはおそらく図書館のような構造になるだろう。入口は一つだが、中は一般の人が見学したり、閲覧したりする部屋（非制限区域）ともつばら研究者が閲覧する部屋（制限区域）が分かれており、さらに書物の整理や補修などに従事する部屋（作業区域）があり、書物を保管する部屋（データベース）があり、常設的な展示と短期的な展示があり、総合的な案内をするカウンター（サイトのトップ・ページ）があるというように、サイト内部が活動によって分けられる。

目下のところ、研究チームは隣接分野の研究者の意見や要望を聞きながらサイトのデザインを検討している。そして、まったく新しいものをつくろうとしながら、じっさいにはどんどん研究施設の図書館に似ていくのに驚かされている。いいかえるなら、長い歴史の中で完成されてきた図書館は、知の蓄積の原型だということをあらためて認識することになったのである。

事実、このサイトの計画には、いくつかのフランスの図書館からも強い関心が寄せられている。図書館もまた新しい知の集積と公開の方法を模索しているのだ。Web における図書館との連携は新しい研究環境には必須の要素だろう。2010 年の海外出張により、マザリーヌ図書館、パリ大学等、フランスの研究機関との連携はきわめて順調に整いつつある¹²⁾。そこでこうした連携・協力関係の構築はメールのやりとりで済むものではなく、直接会って話し合うのがもっとも効果的であるということも確認した。前に進もうとして後退するというよりも、これまでにあった方法の価値をそうして再認識できたのである。

この研究サイトがじっさいに公開されるのは、最短で 2011 年度となる見通しである。公開が早まるのにあわせて、このサイトのデータベースの核となる東京大学コレクションの特徴を記述しておく必要があるだろう。デジタル化されたマザリナード文書として、Web 上で初めて体系的な研究対象

となるコレクションだからである。とりわけ画像やテキストデータだけでは再構築できないこのコレクションの物理的な特徴はここに記述しておく必要がある。なぜならデジタルデータ化はその書物が持っている情報をすべて保全しているわけではなく、そこから抜け落ちる情報があるのを避けられない。もちろん、それを補う利便性や別の可能性も大きいからこそデジタル化が進められているのだが、できるだけ情報を落とさないようにすることも今後の課題である。今の段階ではこうして記述しておくのが最もいい方法のように思われる。ここでは東京大学コレクションの物理的な特徴とコレクションの由来（日本ではこれまで調査されていなかった）を明らかにしながら、マザリナード文書の特性について記述することにする¹³⁾。

なおコレクションの由来の調査に必要な装丁の知識に関してはフランス国立マザリーヌ図書館主任学芸員のイザベル・ド・コニュー女史から、マザリナード文書自体の文献学的調査は故ユベール・キヤリエ教授の協力に多くを負っていることをここに明記しておく。

東京大学コレクションの由来

このコレクションの正式名称は「Mazarinades : A Comprehensive Collection of Year 1647-1652. About 2,800 French Political Pamphlets」（マザリナード文書：1647 から 1652 年にかけての約 2,800 点からなるフランスの政治文書の広範囲なコレクション）という。簡略化して「マザリナード集成」と呼ばれることもある¹⁴⁾。装丁された 43 巻本と桐箱 1 箱からなる。1978 年にアムステルダム の書籍商デッカー & ノルデマン書店から、丸善を通じて購入されたもので、タイトルより実数はやや少ないが 2000 点を超す大型コレクションである。丸善に残る古書売買の記録から、以前の持ち主が「ベルンシュタイン氏の後妻であったモニク・ロラン夫人」であるというところまではわかっていたが、それ以外のことはまったく不明であった。このベルンシュタイン氏が世界的に有名な愛書家のミシェル・ベルンシュタインであることは確実であり、氏がしばしば妻の名前を使って売買していたことは今回、フランス国立古文書学校のアニー・シャロン女史の証言により確認できた。

だが、問題になるのはこのコレクションの内容がじつは単一でないことである。全体は 5 つの下位コレクションから成り、それぞれの由来については、購入時から現在まで明らかにされる機会がなかった。こうした由来調査の大事な手がかりになるのが物理的特徴で、マザリナード文書の場合、まず第一に装丁されているのかどうかが必要である。装丁されていれば、その特徴からおよその年代を推定することができる。また、紋章や蔵書印がそれを所有していた個人に関する情報をもたらす。さらにその内容によって、それらの文書を集めた人物がどのような関心をもっていたのか、場合によってはどの地域に住んでいて、どのような考え方をしていたのかも推測することが可能である。

東京大学コレクションの 5 つの下位コレクションは、それぞれアルファベットの A から E の記号で区別される。個々のマザリナード文書はこの記号の次に巻の番号、つづいてその巻の何番目の文書にあたるかという数字によって示される。分類番号 A-1-1 はコレクション A の 1 巻目の一番初めの文書を指す。以下、A から順番にコレクションごとの物理的特徴と由来、成立年代に関して明らかになったことを記述する。

【コレクション A】(687 点)

このコレクションの装丁には *RECUEIL DE PIÈCES*（文書の集成）という簡素な表題がついている。全部で 9 巻あり、こげ茶色の仔牛革装丁がほどこされ、表紙の中央に金で刻印された紋章（王冠

の下に3つの百合とバトンを組み合わせたもの)がある。背には9個のネール(背皮装丁の書物の背にある数本の隆起した帯状のもので、内部は綴じ糸が盛りあがっている)。小口が赤く彩色され、見返しにマーブル模様の紙が使用されている。これらの特徴から、このコレクションは18世紀初めごろに装丁されたものと考えられる。

表紙に刻印された紋章から、この装丁をほどこしたのはマリ - アデライード・ド・ブルボン - コンティ Louise-Adélaïde de Bourbon-Conti (1696-1750) であるとわかる¹⁵⁾。彼女はコンティ公 François-Louis de Bourbon (1664-1709) とマリ - テレーズ・ド・ブルボン Marie-Thérèse de Bourbon (1666-1732) の間に生まれ、18世紀のもっとも有名な愛書家の一人であった。数多くの本を所蔵していたのでこの紋章のついている装丁の本は多い。

しかし、このコレクションには、コンティ公女のものではない蔵書印も見いだされるのだ。見返しの遊び紙に張られている版画の蔵書印で、紋章の下に Bibliothèque du Château de Valençay (ヴァランセー城図書館) と書かれている。あるいは単に Château de Valençay (ヴァランセー城) と書かれただけの青インクのゴム印がところどころに押されている。この城は今でもフランスのアンドル県に存在する。18世紀末から19世紀初頭に外交家として手腕を発揮した政治家タレーラン Charles Maurice de Talleyrand-Périgord (1754-1838) の城であり、現在もタレーラン家の所有になっているはずである。

しかしながら、蔵書印の紋章はタレーラン個人のもの——3頭のライオンと1頭のイノシシの組み合わせ——とは少し違っている。蔵書票では王冠を戴き、剣をもった3頭のライオンの紋章をさらに2頭の鷲が挟み込んでいる。この王冠を戴く3頭のライオンは18世紀にタレーラン家で使われており、この蔵書票に使用されている図案ときわめて近いものが、ペリゴール伯ガブリエル・マリ・ド・タレーラン Gabriel-Marie de Talleyrand (1726-1795) もしくはその弟であるタレーラン伯シャルル・ダニエル・ド・タレーラン Charles-Daniel de Talleyrand (1734-1788) の紋章である。オック語で書かれた紋章の銘 RE QUE DIOU (我らの上には神しかいない) も一致する¹⁶⁾。これらの蔵書印から、コレクションAはコンティ公女のところからタレーラン家の城の図書館に移ったことは確実である。

このコレクションについては、もうひとつひょうに重要なことがわかった。同じ装丁で、同じコンティ公女の紋章を持ち、ヴァランセー城の蔵書印が押されているコレクションが旧ソヴィエト連邦のレニングラード(現在のサン・ペテルスブルグ) 科学アカデミー歴史学士院図書館 Léningskoié Otdélenié Institouta Istorii Akadémii Naouk で1970年代に見つかっていることだ。このロシア・コレクションを発見し、記述したキャリエ教授に東京コレクションの写真鑑定をお願いしたところ、このふたつは間違いなく同一のコレクションであるとわかった。

キャリエ教授によれば、レニングラードのコレクションは6巻からなり、その内訳は1649年のマザリナード4巻、1650年1巻、1651年1巻である。そしてほぼ年代順に集められたこのコレクションには1652年の巻があってもおかしくはないのだという¹⁷⁾。一方東京のコレクションにおいては、9巻のうちほとんどが1649年の文書である。1巻だけが1650年の文書で、1648年のものがほんのわずかに含まれる。

ところで、フロンドの乱の時期に印刷され、現存している文書の総数は約5,200点あるとされるのだが、その年代別内訳は1648年 - 50点、1649年 - 1975点、1650年 - 725点、1651年 - 800点、1652年 - 1600点、1653年 - 50点である¹⁸⁾。もっとも多く文書が出版された年は、1649年と1652年である。1649年の文書がこれだけ集められているなら、コンティ公女のコレクションには1652年

のマザリナードも多数あったのではないかと考えたくなるのだ。コレクションが売却されたとき——タレーラン家に売られたときか、あるいはタレーラン家からまた売られたとき——に、何巻か抜き取られたか、あるいは城の図書館に置かれているときに、すでにその巻が紛失していたのか。いずれにせよ、同じ装丁のコンティ公女の紋章をもつ1652年のマザリナード装丁本がどこか別の場所で見つかる可能性は濃厚だといえる。

このようにいったん集められ、装丁までされた美しいコレクションが分割されることはそれほどめずらしくない。後で述べるコレクションCにも同じことが起きており、さらにコレクションEで見られるように、合本を壊す事例もある。コンティ公女のコレクションもコレクションCも成立は19世紀以前である。そして、19世紀にはモローの目録の出版により、マザリナード・コレクションが投機の対象になって高騰した。モローの目録の出現により、それを境にコレクターたちの振る舞いが大きく変化したのではないかと推測されるのである。

そもそもマザリナード文書というのは大半が粗末な刷り物だ。ページ数はものによっていろいろで、多くは4～8ページ、しかし、1枚刷りや20～40ページのものもある。中にはマザランの司書であったノーデ Gabriel Naudé (1600-1653) が書いた『マスキュラ』*Mascurat* のように700ページを超えるものもあるがこれは例外中の例外である¹⁹⁾。地下出版のものも多数あり、そうした事情で最初からきちんと製本されていたものはまれである。マザリナード文書は愛書家のもとで何巻もの立派な装丁本となる。それが売られるときにはこの装丁も含めた美術的価値が評価される場合と、特定の文書に1点いくらという値段がつく場合がある。古書店によっては関連する文書を2点、3点と集め製本して売ることもある。薄いマザリナードなら13点集めても厚さはせいぜい5ミリ程度にしかない²⁰⁾。

19世紀にモローの目録が出版されたとき、それまで個々の好みや関心にしがたって文書を集めていたコレクターたちがまず考えたのは、おそらく自分のところのマザリナード文書がモローの目録に記載されているかどうかではなかろうか。1850-51年に出版された3巻本の目録には4000点余りのマザリナードが番号つきで記載されていた。載っていればよし、載っていなければがっかりするか、あるいは「モローも知らない」マザリナードだということで、希少性を主張する根拠になったろう²¹⁾。つまり4000近いタイトルが「鑑定書」つきになったのである。そこで次に考えられることは、モローに記載されていて、自分のコレクションに欠けている文書の収集ではないだろうか。いいかえればモローはコレクションを完成させる基準を与えたのである。モローの鑑定で「希少性が高い」とされたマザリナードの価格は高騰し、コレクターはその1点を求めて競り合うことになる。

たとえば、パリの北にあるシャンティイ城のコンデ図書館（現在フランス学士院の一部となっている）のコレクションはまさにそのようにして「完成」されたものである。これは最後の城主ドマール公爵 Henri d'Orléans, duc d'Aumale (1822-1897) によるものだが、2010年に案内してくれた同図書館の学芸員オード・ルフェーブルによるとシャンティイ城のマザリナード・コレクションもまずモローの目録どおりに集めることから始められた。そして「目録記載の文書はほぼ完全にそろっている」のだそうである。19世紀のひじょうに鑑識眼の高い美術品コレクターとしても知られるドマール公は、できる限り状態のいいものを探し、後からより保存状態の良いものが見つかる買い替えるという念の入れようだったという。このコレクションはそうした熱心さの表れから、装丁されていない。製本したら交換がきかなくなるからだ。ドマール公はモローの同時代人であり、その収集活動はモローの目録が出版された時期（1850 - 51年）にちょうど重なる。オード・ルフェーブルによれば、こ

の収集スタイルは19世紀半ば以降、現在まで変わらない、マザリナード・コレクターの基本スタイルだということである。

つまり、19世紀以降のコレクターの場合には、一点一点で買い求め、モローの目録の最初の3巻にある4,084タイトル(巻末の追加を入れると4,314点)をひととおり収集して「完成」する。そこで、すでに合本されている文書の中に探しているタイトルがあれば、古書店側ではそれだけを買いたいという要望に応えるためにコレクションの一部を、あるいは極端な場合には、合本されているものを崩しても売ることがあった。コレクターが装丁本を買い求めてから合本を壊したということもあっただろう。

さて、コレクションAは1649年の文書が中心だが、1648年の文書も7点ほど含まれている。これは小さな数字だが、1648年に出版された文書はそもそも50タイトルしかない。この7点は公文書に属するもので時系列的に一つのまとまりを成している。それは1648年7月18日にパリ高等法院で確認された課税に関する不正追及のための組織を作ることを許可した国王の許可状²²⁾、同じ日に援税院で確認された、治安監督官の罷免、および一部の税免除とその任にあたる役職の創設に関する王令²³⁾、9月1日および4日付年金支払い規則に関する高等法院判決²⁴⁾、オルレアン公およびコンデ大公から高等法院に宛てた9月23日付の親書²⁵⁾、9月27日付治安と通行に関する高等法院判決²⁶⁾、10月12日付で徴税請負人らに牛や羊などの家畜に対し不当に課税を引き上げることがを禁止した高等法院判決²⁷⁾、10月24日に高等法院で確認された司法、治安、課税に関する規則および人心の安定に関する王令²⁸⁾である。これらの文書の印刷時期は、課税をめぐる徐々に高等法院と宮廷の緊張が高まり、課税に反対する高等法院の大法廷評議官ブルーセル Pierre Broussel (1575-1654?) の逮捕(8月26日)をきっかけに最初の武力衝突が起きてパリが閉鎖された「バリケード事件」から、宮廷と高等法院の間で折衝がつづき(9-10月)、ようやく高等法院の改革案を宮廷が再確認する10月24日までの文書であり、課税をめぐるフロンドの乱の始まりがよくわかるものだ。

コレクションA687点のうち、重複するタイトルは6点である。

【コレクションB】(937点)

全体を表す特別な名称はないが、20巻からなるこのコレクションBは下位コレクションのなかで最大である。

明るい茶色の仔牛革、ガスコン様式の細かい「点」による金箔押しの装飾が表紙全体を覆っている。その中心にBとDを組み合わせたモノグラム。また見返しにも革の縁にそって金箔押しの装飾(ダンテル)がある。背にはネールがあり、通し番号が振られている(10、11巻がアラビア数字だが、その他はローマ数字)。小口は赤。見返しの遊びに使われている白紙にはすかし模様(王冠の下に、左半分に複数の花、右半分に横線を配した盾の紋章)が見出される。おそらく17世紀の装丁と思われる。

コレクションBには2種類の蔵書印が見つかる。一つは表紙の裏のマーブル紙に張られた紋章の版画(王冠をいただくこの紋章は、中央に両側から二頭のライオンに支えられる楕円があり、その中に左上から右斜め下に横断するバトンがある。バトンの中央に4本の剣状のモチーフが一列に配置されている。このバトンで区切られてできる上下の空白には縦の細い線が引かれている。これはこの半円の部分が「赤」であることを示すものだろう。ただし、王冠のかたちはコレクションAのコンテイ公女の場合と違って、百合のついていない王冠、すなわち公爵の紋章である。)もう一つは各巻の

一番最初の文書に押されたゴム印「ExBibl. Ios. Ren. Card. Imperialis.」である。

この20巻はそれぞれが人物を中心にまとめられているおり、関連する肖像画が多数入っているのが特徴である(105枚)。これらの版画の作者はピエール・ダレ、Pierre Daret (1604-1678)、バルタザール・モンコルネ Balthazar Moncornet (1600-1668) などであり、いずれも17世紀の有名な版画家である。

13巻までは人物ごとにまとめられており、それぞれタイトルページに名前が入っている。1－3巻目は国王(RECVEIL / DE / PLVSIEVRS / PIECES / TOVCHANT / LES AFFAIRES / DV ROY.)、4巻目は王太后(RECVEIL / DE / PLVSIEVRS / PIECES / TOVCHANT / LES AFFAIRES / DE LA REYNE.)、以下ガストン・ドルレアン(5巻目)、コンデ公(6－7巻目)、モンパンシエ公爵夫人とレオポルド大公(8巻目)、ボーフォール公(9巻目)、レ枢機卿(10巻目)、マザラン(11－13巻目)と続く。15巻目以降は無題(14巻目)、ポントワーズ高等法院(15巻目)、和平(16巻目)、その他の文書(17－20巻目)となっている。

この各巻の並び順が、国王を頂点とする「身分の序列」に一致することは意味深長である。国王(第1－3巻)、王太后(第4巻)の後には、先王の弟ガストン・ドルレアン(第5巻)であり、筆頭親王家のコンデ大公(第6－7巻)はそのあとにくる。ボーフォール公爵(第9巻)は、ガストン・ドルレアンの娘(モンパンシエ公爵夫人)や外国の王族(レオポルド大公)(第8巻)より先に出てはいけないう。しかしながら〈フロンドの乱〉で最後に失脚したはずのレ枢機卿がマザラン枢機卿よりも「上席」を与えられているのは、マザランへの反感がそうさせているのだろうか。それでもマザランの3巻がもっともよく読まれたようで、一番擦り切れている。

この20巻のコレクターについては、装丁に残されたB.D.あるいはD.B.のモノグラムしか手がかりがなく、誰であるのか、個人を特定するにはまだいたらない。しかし、このコレクションの物理的特徴から、私たちはおぼろげながらこの人物のポートレイトを描くことができる。

まず、この人物はフロンドの乱の同時代人であることはほぼ間違いない。反マザランにせよ、反コンデにせよ、反レ枢機卿にせよ、誹謗文書、ジュルナル、国王宣言、手紙などをひじょうに熱心に、しかも広範囲に集めている。そして特にフロンドの乱の後半、大貴族の反乱の時期の900を超える文書を集め、美しい装丁本にした。それらの文書を分類するときに、彼(あるいは彼女)は当時の社会の身分的序列にしたがって整理した。この人物の収集にかける情熱が人並み外れていたことは、そこに発禁になっていた文書も見いだされることからうかがえる。たとえば1649年に王妃を攻撃し、きわどい表現で発禁になっていた*La Custode de la Reine, qui dit tout*(王妃のベッドの帳、すべてを暴露)も含まれている²⁹⁾。しかもちゃんと「王太后」の巻に収められているという念の入れようである。つまり彼(あるいは彼女)は制度的には身分社会の中にいて、序列をごく自然に受け入れながらも、この歴史的出来事に対してできるだけ多くの情報を人物を中心に再構成しようと試みているのである。

そしてこの同時代人による収集のおかげで、私たちはたいへん貴重でめずらしい文書を見ることができる。

このコレクションのほとんどの文書は1652年のものであるが、キャリエ教授によれば、1649年について数多くの文書が出版された年であるとはいえ、それぞれの発行部数は比較にならないほど落ち込んだという。流通する部数が減ったために集めにくく、かなり大きなコレクションでも1652年の文書は数が少ない³⁰⁾。なかでも次にあげる3点は貴重なものだ。第5巻にあるコンデ公に関する文

書で *Relation veritable de ce qui s'est fait et passé en Parlement le Lundi 7. Octobre 1652. Toutes les Chambres Assemblées. En presence de son altesse royale, & Plusieurs Ducs & Pairs de France. Avec la nouvelle déclaration de son Altesse Royale, pour la Paix Generale.* (1652 年 10 月 7 日月曜日の高等法院にて起きし事柄の真実の報告書。国王陛下ならびにフランスの王侯の御前にてすべての最高法院が集結。全体的和平に関する国王陛下の新たな宣言も含む)³¹⁾ は、これまでゲッティンゲンに 1 点しか現存しなかった。これで世界に 2 点となったのである。

また、*Reqvest des pavyres mandians et manovvrier de la ville & faux-bourgs de Paris, entée à son Altesse Royale, & donnée à Monsieur de Broussel, puis communiquée à Monsieur le Lieutenant Particulier. Pour la police du pain, contre les Boulangers, où est représenté leurs tromperies & malversations.* (パリの街区に住む貧しい物乞いとしがない職人たちの嘆願書。国王陛下がご覧ののち、ブルーセル氏に渡され、代官に伝えられ、パン屋に対してその悪徳商売に裁きを求めるもの)³²⁾ も、これまではロンドンのブリティッシュ・ライブラリーに 1 点あるのが確認されただけであった。いずれもパリのマザリーヌ図書館にはない文書である。

さらに *Declaration du Roy portant restablissement de la Chambre des Comptes. transférée à Ponthoise, en la Ville de Paris. Verifiée en ladite chambre le vingt-deuxième Octobre 1652.* (ポントワーズに移転させられていた会計監査院をパリに戻す国王宣言書。1652 年 10 月 22 日当該会計監査院にて確認)³³⁾ は、マザリーヌ図書館にもフランス国立図書館のカタログにも見出されない。これはフロンドの乱の最後によりパリに宮廷が戻り、ルーヴル宮で国王親裁座がもたれ、すべての反対勢力が排除された日の国王宣言のひとつで、フロンドの乱の終わりを告げるものだ。キャリエ教授によればおそらく今日現存する唯一の文書であろうと思われる。

937 点のうち、重複するタイトルは 86 点で、下位コレクションの中では一番多い。やはり人物ごとにまとめるため、同じ文書が複数の人物にかかわる場合にはそれぞれの巻に入れているからだろう。

【コレクション C】(847 点)

このコレクションにつけられているタイトルは *RECVEIL DE DIV. PIECES* (さまざまな文書の集成) である。

茶色仔牛革装丁で 12 巻からなる。第 1 巻から第 10 巻までは「1649」。第 11 巻は「1651」、第 12 巻は「1652」と金字で刻印されている。全体の通し番号はない。表紙を縁取る金箔押しの線以外に装飾はなく、小口は朱赤に染められている。見返しは無地の紙。17 世紀後半か 18 世紀初めの装丁であると考えられる。

このコレクションの特徴は美しい版画——各巻の最初に綴じられている一枚の版画、さらに 56 枚の肖像画、アルファベットの大文字を中心に花のモチーフで飾った図案(文書のアルファベット順の整理に使われている。18 世紀の様式に近い)——である。

まず、各巻の最初に綴じられている版画には男女二人の人物が描かれている。ギリシャ風の衣服をまとった女性は右側に立ち、掲げた右手に二種類の冠(ひとつは月桂樹)を、下げた左手には 3 本のペンを持っている。足元に一頭の羊がまわりついている。一方、男性は床にひれ伏すように、画面の左方向に頭を向けて両手を床についている。手元の床には手かせがころがり、目隠しをつけたマスク、鎧の肩当、剣が置かれている。図柄の左手にステンドグラスに模して紋章を描いた窓があり、その図柄がシュヴルーズ公爵夫人 Marie Aimée de Rohan, duchesse de Chevreuse (1600-1679) を指

していると思われる。窓は公爵の王冠をいただいた紋章のかたちをしており、垂れ幕は表がロアン家の九つの菱形、裏がエルミースの毛皮になっている。窓のステンドグラスは右半分がロアン家の九つの菱形、左半分が複雑に組み合わせあったロレーヌ・シュヴルーズの紋章である。この紋章の中央から、女性に向かって三本の帯となった光が降りそそぐ構図になっている。シュヴルーズ公爵夫人はルイ 14 世の母アンヌ・ドートリッシュの側近だったが、宮廷を追われ、陰謀家として活躍する。フロンドの乱の主要人物の一人である。そのほかの肖像画はジャン・ダレ Jean Daret (1604-1678) とルイ・ボワスヴァン Louis Boissevin (1610-1685) の作品が半々である。

さらにこのコレクションの最大の特徴といえるのは複数の書き込みがあることだ。その一つが第 1 巻目 2 枚目の遊び紙に残された、次のような記述である。

「Cet ouvrage a appartenu au Cardinal Dubois il a été pris a la Bastille par M. Le Noir ancien Lieutenant de Police qui en a fait cadeau a M. Gillebert.」(この製本された一揃いの文書は、デュボワ枢機卿の所有だった。それがバ스티ーユにて、元パリ警察長官ル・ノワール氏によって取得され、彼がジルベール氏に贈ったものである。)

この書き込みによって、私たちは少なくともこの 12 巻のもとの所有者の 3 人を特定することができる。しかし、「デュボワ枢機卿」とは誰なのか、なぜ、この一揃いがバ스티ーユにあり、「元パリ警察長官ル・ノワール氏」の手に渡り、さらに「ジルベール氏」に贈られたのか。

まず、装丁の年代に最も近い枢機卿で「デュボワ」という名前の人物は、おそらくギヨーム・デュボワ Guillaume Dubois (1656-1723) ではないかと推定できる³⁴⁾。ルイ 14 世の没後、フィリップ・ドルレアン Philippe d'Orléans (1674-1723) の摂政時代にフランスの外交で活躍した人物で、1721 年に枢機卿となり、翌年には宰相になっている。アカデミー・フランセーズの会員でもあった。サン・シモン Louis de Rouvroy, duc de Saint-Simon (1675-1755) の回想録などでも言及されている人物である。しかし、このコレクションが枢機卿のものであったとしても、なぜそこにあったのかはわからない。

一方、「元パリ警察長官ル・ノワール」とは『パリ歴史事典』*Dictionnaire de Paris* にたびたび登場する Jean Charles Pierre Le Noir (生没年不明) にちがいない³⁵⁾。この人物が警察長官職にあったのは、1774 年 8 月から 1775 年 5 月にかけてと 1776 年 6 月から 1785 年 8 月にかけてである。遊び紙の書き込みには「元パリ警察長官 ancien Lieutenant de Police」となっているので、これが書かれたのはル・ノワール氏がその職を離れていた 1775 年 5 月から翌年の 5 月か、1785 年 8 月以降のことであろう。前述のデュボワ枢機卿はすでに他界している。

「ジルベール氏」なる人物に関しては皆目見当もつかない。ル・ノワール氏が活躍した時期が時期であり、場所もバ스티ーユと明記されているだけにフランス大革命との関連を考えざるをえないが、まったく手がかりがない。いずれにせよ、この譲渡があったときにはこれらのマザリナード文書は現在のように装丁されていたということである。

さらにもうひとつ、コレクション C には、何者かによる手書きの目次がつけられている。最終巻の後ろの遊び紙に書き込まれた情報から、私たちはコレクション C のもともとの姿を知ることができる。現在 12 巻一揃いのこのコレクションは、もとは 17 巻からなり、1,140 点の文書と 75 枚の肖像画から構成されていたのだ(現在のコレクション C には 847 点の文書と 56 枚の肖像画が含まれる。)全巻がそろっていれば、コレクション B の 937 点を超えていた。足りないのは 11, 12, 13, 14, 16 巻目である。現在のコレクション C には、1649 年の文書 (1 - 10 巻)、1651 年の文書 (11 巻目、も

とのコレクションでは15巻目に相当)、1652年の文書(12巻目、もとのコレクションでは17巻目に相当)が含まれる。もしかするとコレクションAの場合と同様に、どこかで同じ装丁のコレクションが見つかるかもしれない。

ところでこのコレクションには11巻目の一つだけゴムの蔵書印が押されている。あとからペンで消されているのだが、そこには「Bibliothèque de Mr. Cousin」(クーザン氏の蔵書、あるいは図書館)と読むことができる。これがシュヴルーズ公爵夫人に関する本を書いたヴィクトール・クーザン Victor Cousin (1792-1867)を指すものかどうか、確信はない。しかし手書きの筆跡がヴィクトール・クーザンのものでないのは確かだ。

ところで、コレクションCは基本的にアルファベット順に分類されている。しかし、同時に、このコレクションの編者は散文と韻文を別々に装丁させてもいる。韻文は3巻あり、そこには1649年に流行のピークを迎えるビュルレスクという文芸ジャンルの作品が豊富に見いだされる。

このジャンルは、一言でいうなら、高尚な主題を卑俗な言葉で表現し、その落差で笑いを取るものである。揶揄、中傷にはもってこいの表現形式であるところから、マザリナード文書全体に占める割合も大きい。コレクションCの韻文作品は200点あまりになり、それだけでも一つの下位コレクションを形成することができるが、とりわけビュルレスクの研究にはこれだけで一個のコーパスとなりうるものである。

特に第8巻はビュルレスク作品が集まっており、1649年3月初めに、マザランへの抗議の声がいよいよ高まる中で出版された人気のスカロン作品 *Le Passeport et l'Adieu de Mazarin, en vers burlesques*。(通行証でマザランとおさらば、韻文ビュルレスク)³⁶⁾もある。ポール・スカロン Paul Scarron (1610-1660)はこのジャンルの創始者であると同時に最も優れた作品を残した詩人である。「マザリナード文書」の語源になったとみなされるマザランに対する激しい誹謗文書『ラ・マザリナード』*La Mazarinade* (1651年)の作者である³⁷⁾。

さらに、17世紀の同時代人で、マザランの司書であり、皮肉にも歴史的にはマザリナードの最初のコレクターとなるノーデ³⁸⁾と、最初にマザリナードの目録を作った19世紀のモローの両方から「フロンドの乱のもっとも機知に富んで楽しい文書」と評価されている *L'Agréable récit de ce qui s'est passé aux dernières barricades de Paris*。(パリのバリケードの後ろで起きた出来事に関する聞いて楽しい話)³⁹⁾もそこに見つかる。作者ヴェルドゥロンヌ Claude de L'Aubespine, baron de Verderonne (生没年不明)は同名の父(国璽尚書 Garde des Sceaux をつとめた)の方が有名だが、自身はルイ13世の弟ガストン・ドルレアン Gaston Jean-Baptiste de France, Duc d'Orléans (1608-1660)の郎党で、職業的作家ではなかった⁴⁰⁾。内容は1648年、内乱の初期にパリが封鎖された「バリケード事件」で宮廷の側から高等法院やパリ市民をからかうもので、軽妙だが陰湿なところはない。手書きで回覧されていたものが1649年に印刷された。ノーデによれば、このスタイルを真似た作品がその後多数生まれたようだ⁴¹⁾。

ヴェルドゥロンヌのほかにも、ビュルレスクの最盛期の作者として名前のあがる作家⁴²⁾——スカロン、シラノ・ド・ベルジュラック Savinien de Cyrano de Bergerac (1619-1655)、サン・ジュリアン Saint-Julien (生没年不明)、ジャン・デュヴァル Jean Duval (? - 1680)、ラベ・ド・ラフマ L'abbé de Laffemas (生没年不明)——の作品は、少なくともかならずひとつは、このコレクションCで見つかる。たとえば、シラノ・ド・ベルジュラックはフロンドの乱に関わる文書を7~8点出しているのだが、その中の1点で、コレクションCに含まれる *Le Ministre d'État flambé*。(大臣炎

上)⁴³⁾は1649年「パリ包囲」の時期のもっとも優れたビュルレスクのひとつとしてノーデが評価している反マザラン文書だ⁴⁴⁾。スカロンの『ラ・マザリナード』より前に、人民裁判的な処刑場面が描かれている⁴⁵⁾。

847点のうち、重複するタイトルは9点である。

【コレクションD】(114点)

羊皮紙装、2巻本で、東京大学コレクションの中ではもっとも簡素な外見である。第1巻には肖像画なし。第2巻には5枚。

背表紙に手書きインクの文字で「*Recueil de pièces sur l'histoire de Louis XIII et Louis XIV / 1ère Partie / Mazarinades*」(ルイ13世と14世の歴史に関する文書の集成・第1部・マザリナード)と書かれている。(第2巻は同じタイトルで「*2e Partie*」)最後の「*Mazarinades*」の筆跡だけが、後から付け加えられたものかどうかの疑問を残す。

遊び紙の上にも手書きで「*Recueil de plusieurs / pièces servans à l'histoire.*」(歴史の理解に役立つ文書の集成)とあり、その下に線が引かれている。その右上に鉛筆で「S 752」、下線を引いてその下に「2600」。次に手書きの目次の「*Table des pièces contenues au present Recueil*」(この集成の文書一覧)が来る。

右ページ右肩に通し番号。もともと印刷されていたページ番号を消して書いている。ただし、もとのページ番号が右肩に印刷されていない場合は直接書き込んでいる。

羊皮紙の状態、手書き文字の字体から、おそらく17世紀に製本されたと思われる。下位コレクションのなかでは、最も古いコレクションだろう。所有者を示す印はないが、少なくとも「右ページ右肩の通し番号」が、もともとの文書のページ番号を消してまで書かれているということは、明らかに19世紀のコレクターとはちがう意識で収集され、保管されていたことをあらわしている。つまり、コレクションDを所持し、この通し番号をつけた人にとって、この2巻本はそこで完結しているとみなされていたということである。

さて、この一番小さな、一番古い、そして一番装丁の簡素なコレクションDが、じつは私たちに多くの発見をもたらしてくれたのである。東京大学の認識では「コレクションDにはモローの目録に記載されていないとされる文書が17点ある」とされていた。これらをモローと照合しなおすと、1点(D-1-20)はモローの第二補遺にきちんと分類があった。この文書はマザリーヌ図書館のカタログにも記載がある。別の2点(D-1-26、D-2-25)もまたマザリーヌ図書館のカタログに記載されていた。残りはモローにもマザリーヌ図書館にも知られていない文書ということになるが、それだけでは新発見とはいえない。しかしながら、キャリエ教授の総合目録と照合すると、コレクションDには5点のひじょうにめずらしいマザリナードが含まれていることがわかった(D-1-46、D-1-66、D-2-23、D-2-25、D-2-45)。そのうちの2点(D-1-46、D-1-66)は世界でも東京にしか残っていない。その希少性において特筆すべき文書である。それら5点について、以下に紹介する。

D-1-46 *Arrest dv Parlement de Bordeaux sur la retraite de Monsieur le Prince.* (コンデ大公の隠居に関するボルドー高等法院の裁決)は最後の署名と一緒に記された日付によれば、1651年7月13日にボルドーで書かれたものである。D-1-66 *Récit véritable de ce qui s'est passé au Chasteau du Louvre à Paris, par l'ordre de leurs Majestez, envers la personne du Cardinal de Retz, au sujet de la Paix.* (パリのルーヴル宮において、陛下の命により、和平のためにレ枢機卿に対し行われたこと

に関する真実の報告書)はオルレアンで出版された1652年の文書である。この2点は、モローにつづく他の研究者による目録やマザリーヌ図書館にも記録がないようであるとわかった段階で、フランスにコピーを送り、キャリエ教授に鑑定を求めた。もっとも網羅的なマザリーヌ文書の記録であるキャリエ教授の目録にも記載されていなかったという意味で、これら2つのマザリーヌは新発見といってよいと思われる。

D-2-23 *Dialogve d'vn Batelier, d'vn Vigneron, et d'vn Savetier. Sur les affaires du temps present.* (船頭とブドウ栽培者と靴直しの会話 時事問題について)は、現在閲覧できるのは英国のブリティッシュ・ライブラリーにある一点だけである⁴⁶⁾。

D-2-45 *Harangve et Remerciement fait au Roy par les Bordelois, sur le sujet de la paix. Avec ses Articles.* 1650 (和平に対してボルドー住民の国王に対する感謝の演説)はオルレアンの図書館に1点だけ残っていた。

D-2-25 *Dialogue d'Ingré sur les affaires du temps.* (アングレの時事放談)は4ページ足らずの1648年の文書である。これまでマザリーヌ図書館に1点だけ残っていたのだが、たいへんめずらしいものだ⁴⁷⁾。マザリーヌ文書のほとんどがパリで出版されたのに対し、この文書はパリから100キロ以上離れたオルレアンで最初に出版されている。モローの目録[1078] *Dialogue de deux guepeins sur les affaires du temps.* (二人のゲッパンによる時事対談) (1649年)と[1093] *Dialogue guépinois sur les affaires du temps, ou entretien de Louet et Brase.* (ゲッパンの時事対談、あるいはロレとブラズの対話) (1652年)は、この文書がパリで再版されたものである。絶対的に数の少ない地方発のマザリーヌ文書である⁴⁸⁾。

D-2-25にあるIngréというのはオルレアン近郊の村であり、モローの目録に載っている2点のタイトルに含まれる guepein, guépinois はオルレアン近郊出身者とオルレアン方言を指す。キャリエ教授によれば、これは書き残され、印刷された最後のオルレアン方言のテキストであり、その意味でも歴史的に価値がある。テキストは方言の音のニュアンスが良く伝わってくる。

さて、こうした貴重な文書を今日に伝えてくれた人はいったいどのような人物だったのか、やはり気になる場所である。このコレクションの背表紙のタイトルはすでに見たように「*Recueil de pièces sur l'histoire de Louis XIII et Louis XIV / 1ère Partie / Mazarinades*」(ルイ13世と14世の歴史に関する文書の集成・第1部・マザリーヌ)となっている(第2巻は同じタイトルで「第2部 *2e Partie*」)。「マザリーヌ」という表題をあたえながら、「ルイ13世からルイ14世の歴史に関する文書」といっているのが、わたしたちには奇妙に見える。コレクション第1巻の最初の7点は、1637年から1646年までの文書で、内容はルイ13世、その母マリー・ド・メディシス、リシュリュー枢機卿などに関するものだ。これらの文書を集めた人物がどのような人かはわからないが、17世紀の末までにこの2巻を製本させたことから、フロンドの乱の同時代人に近いと思われる。そしてオルレアンにいた可能性が高い。この人物にとって、17世紀とはふたりの国王(ルイ13世と14世)、ふたりの摂政、ふたりの宰相によって特徴づけられる動乱の時代だったのであろう。そして、これらの文書を束ねて、製本させ、さらに遊び紙の上に「ルイ13世と14世の歴史理解に役立つ文書の集成」と書きつけた。その筆跡は同じだ。少なくとも、この人物にとって、それらの文書は、まず何よりも「歴史の証言」として保管されていたのだろう。しかし、背表紙のタイトルの一番最後に行を替えて書き込まれている「*Mazarinades*」はこの同じ人物が書いたものだろうか。インクの退色の様子はほとんど同じに見えるが、わずかながら筆跡が異なるように思われる。これが、後に書き込まれたものなら、

「マザリナード文書」というものの成立を象徴的に物語っている。「フロンドの乱の頃の文書」をまとめたその束を後から「マザリナード文書」と呼んだということである。それははじめ「反マザラン」の意味で用いられていた「mazarinade」という言葉が、やがてマザランへの非難のみならず、さまざまな文書を指し示すようになった事実と呼応する。

114 点のうち重複は 1 点のみであった。

【コレクション E】(130 点)

未製本（桐箱入り）で、4 つの束になっている。

単体で青い紙の表紙がついているものもある。ある程度まとまった量で重ねると綴じ紐のあとが一致するものもある。右肩に連続する通し番号のようなものが振られているものもある。その他小さな書き込みがある。

コレクション E の状態が示すのは、コレクション A のところすでに述べたように、おそらくは売買の目的で合本を壊されたコレクションの残骸である。右肩に番号がついているものは、コレクション D のように製本後につけられたページ番号にちがいない。青い紙の表紙がつけられたものはおそらく最初から製本されていなかったものだろう。合本を壊してまで売る価値があったものか、あるいは逆に売れ残ったものかは、にわかに判断できない。それを知るにはマザリナード文書の取引相場を知る必要があるだろう。しかしながら、そうした商品価値を別にしても、このコレクションにはフロンドの乱に関わる重要な文書が含まれている。たとえば E-30 *Lettre d'un marchand de Liège à un sien correspondant de Paris, avec l'instruction secrète du cardinal Mazarin pour Zongo Ondedei, retournant à Paris*。（リエージュの一商人がパリの取引先に宛てた手紙 マザラン枢機卿がパリへ戻るゾンゴ・オンドゥデイに与えた秘密の指示を含む）は、1651 年夏に激化するフロンド派とコンデ派の対立に関わる重要な文書である。また、文芸のスタイルとしても E-44 *Les Triolets du temps, selon les visions d'un petit-fils du grand Nostradamus, faits pour la consolation des bons Français et dédiés au Parlement*（ご時勢トリオレ、大ノストラダムスの孫による予見をもとにし、良きフランス人を慰めるために編まれ、高等法院にささげられた）は 1649 年 1 月から 4 月にかけての「パリ包囲」の雰囲気をよく伝えるジャン・デュヴァルのトリオレ（基本的には 8 音綴 8 行の三節からなる短い詩形式）である。ビュルレスクの流行が頂点に達した 1649 年の代表的 4 作のひとつだ⁴⁹⁾。

特筆すべきは、コレクション E にルーアンで出版されたマザリナードが少なくとも 8 点見つかっていることだ。調査を進めればもっと出てくる可能性がある。

コレクション D にはオルレアンのマザリナードがあったように、「マザリナード」と呼ばれる文書にはパリばかりでなく地方で印刷されたものもある。しかし、その数は少なく、通常は、まずパリで印刷された文書がかなり流通した後から、地方でも再版されるというパターンである。また、パリの役人から地方総督へ、友人から友人へ個人的に、あるいはコンデ派のように組織的に送る場合もあったが、多くは書店を通じて地方へも送られたのである。それゆえにパリで出版された文書が地方にも多く見つかる。たとえばグルノーブル市立図書館が所蔵する 3000 点のマザリナード文書のうち 90 パーセントがパリの出版物であり、コレクション D でオルレアン文書といっしょに多くのパリの文書が見つかるのもそのためである。

地方の印刷業者はパリの文書を再版することに熱心だった。「パリの刊本にもとづいて」という表現がこうした事実を雄弁に語っている。こうした現象がもっとも頻繁に見られるのが、フロンドの乱

の前半ではルーアン、後半はボルドーという地方の反乱の拠点となす二都市である。ルーアンの場合は地方の総督と連帯をうながすため、ボルドーの場合は逆に蜂起をうながすためにこの種の再版が行われた。一方、ルーアンではしばしばフロンド側の優れた文書や重要なものも再版されている。パリからの文書が大量に入ってくる上に地元で再版されていたので、前半のフロンドにおいてルーアンの住民はパリの事情によく通じていた。一方、ボルドーは独立性が高く、フロンドの乱全般を通じてルーアンほどパリの文書の影響を受けなかった模様である⁵⁰⁾。

コレクション E のルーアンで出版されたマザリナード 8 点のうち、6 点までが青い表紙と 600 番台の数字をもっている。青い表紙の文書は E の箱のなかに全部で 9 点あるので、残りの 3 点もルーアンとの関連を調べてみる必要があるだろう。

モローはマザリナード文書の目録を作るにあたって、パリのコレクションを中心に調査した。じつは地方の出版についてはモローには記載されていないものが多い。今後地方での調査が進めば、新たな発見が加わる可能性がある。その意味で、コレクション D と E に見られる地方で出版されたマザリナードは今後の研究の大きな手掛かりになるだろう。

コレクション E の 130 点のうち、重複するタイトルは 4 点だった。

おわりに

以上にのべたマザリナード文書の資料体としての特性、そしてこれから公開される研究サイトの核となる東京大学コレクションの記述とが、17 世紀以外の領域の研究者の方の目にとまり、少しでも関心を引くことができたなら、この小論の役目はじゅうぶんに果たされたと考える。なぜなら、これからのマザリナード研究は小さな専門領域にとどまらず、領域横断的に参加してくださる多くの研究者の交流によってこそ真の発展に向かうと考えるからである。そして Web 上に開かれる仮想空間の研究共同体が、物理的な隔たりや時間さえも超えて、知の集積のみならず新しい発見の場となることを期待し、そのために努力を惜しまないことを自らに約束して結語としたい。

-
- 1) Hubert Carrier, *La Presse de la Fronde (1648-1653) : Les Mazarinades. La Conquête de l'opinion*, Genève, Librairie Droz, 1989. *La Presse de la Fronde (1648-1653) : Les Mazarinades. Les Hommes du livre*, Genève, Librairie Droz, 1991. この 2 冊を区別するために、1 巻目を *La Conquête de l'opinion*、2 巻目を *Les Hommes du livre* と呼ぶのが一般的だ。定義に関しては、*La Conquête de l'opinion*, pp.60-69。
 - 2) mazarinade の語義の変遷について、詳しくは前述の博士論文「マザリナード文書とは何か——コーパスとしての東京大学コレクション」をご参照いただきたい。
 - 3) Célestin Moreau, *Bibliographie des Mazarinades*, Société de l'Histoire de France, Paris, J. Renouard, 1850-1851, 3 vol., Réimpression anastatique, New York Johnson Reprints, 1965. モローによるこの書誌(通称として「モローの目録」「カタログ」と呼ばれている)の分類番号が現在までマザリナード文書の整理の基本として使われている。ここでは個別の文書を指す時、東京大学コレクションにある場合にはその分類番号(例: A-1-1)を先に出し、モローの分類番号は[]に入れて併記する。
 - 4) フロンドの乱に関しては、Hubert Méthivier, *La Fronde*, Paris, PUF, 1984 ; Orest Ranum, *La Fronde*, Paris, Seuil, 1995 ; Pierre Goubert, *Mazarin*, Paris, Fayard, 1990.
 - 5) 「フロンドの乱」という呼称のもとになった「fronde」とは、革ひもを使って石を飛ばすための道具であり、古くは聖書の時代にダヴィデが巨人に対抗するときに使ったとされるが、17 世紀には子供の玩具になっていた。同時代人(たとえば、レ枢機卿やモンパンシエ嬢など)の回想録によれば、高等法院のマザランに対する抗議行動を、評定官バショモンがこの玩具で石を投げることを意味する「fronder」という動詞を使

って「高等法院がバリの溝に隠れて投石する学童のごとくふるまった」と評したことから、唄にも歌われ、この呼び名が広まった。現代でも「反抗する」「権力に対抗する」などの意味で使われる。

- 6) ロジェ・シャルチエの『フランス革命の文化的起源』（松浦義弘訳 岩波書店 1999年）の問題系につながる課題であると考えられる。
- 7) Hubert Carrier, *op. cit.*
- 8) Hubert Carrier, *op. cit.* この著作の中で、キャリエ教授は総合目録の刊行を予告しているが、教授が2008年8月に亡くなったため未刊行であり、出版の予定は立っていない。筆者は1997年から東京大学コレクションの調査に関してキャリエ教授の協力を得ており、ここに発表する研究成果は未刊行の教授の目録に負うところが多いことをここに感謝とともに記しておく。
- 9) Christian Jouhaud, *Mazarinades, la Fronde des mots*, Paris, Aubier, 1985, p.17.
- 10) Web上の研究サイトの動向については、拙論「マザリナード・プロジェクト——人文科学研究の新しいコーパスを考察する」『人文』7号、2008年、pp.87-106。
- 11) この構想については、前掲の拙論において詳しく述べられているので、ここではそれ以後に具体化し、実現化しつつある点について述べることにする。
- 12) 計画が現在進行中のこともあり、ここで詳しく進捗状況を述べることはしないが、いずれあらためて、「新しい研究環境に関する総合研究」の一部として、具体的にどのような連携形態が望ましいか問題点も含めて考察したい。
- 13) 東京大学コレクションに関する記述は前掲の学位取得論文をもとにしている。由来に関する内容の一部は1834年から発行されているフランスの古文書専門研究誌『*Bulletin du bibliophile*』誌（No1、2009年、pp.107-123）に発表した（フランス語）。ここではさらに新しくわかったことを加え、このコーパスの特性として記述すべきことを中心に全面的に書き直すことにした。なお、このコレクションの由来が日本語で一般向けに紹介されるのは今回が初めてである。
- 14) 東京大学図書館月報『図書館の窓』1979年7月号、pp. 80-81。
- 15) Olivier Harmal de Roton, *Manuel de l'amateur de reliures armoriées français*, Paris, Ch. Bosse Libraire, 30 vol. ; 29e série (Souverains et Princes français), 3e partie : Planches 2614 - 2685, 1935, Pl. 2643.
- 16) *Ibid.*, 19e série (meubles), 2e partie : Planches 1865-1967, 1930, Pl.1944.
- 17) Hubert Carrier, « Souvenirs de la Fronde en U.R.S.S. : les collections russes de Mazarinades » in *Revue historique*, 1974, no 511, juillet-septembre, p. 41.
- 18) Hubert Carrier, *La Conquête de l'opinion*, p.84.
- 19) 『マスキュラ』の正式名称は *Jugement de tout ce qui a été imprimé contre le cardinal Mazarin, depuis le sixième janvier jusqu'à la déclaration du premier avril mil six cent quarante neuf*. Paris, 1649. 他のマザリナードを批評するもので、対話形式で書かれている。正式名称は長いので登場人物の名前をとって、一般には「マスキュラ」と呼ばれる。1649年の初版のときには492ページだったものが、1650年の第2版では718ページに増えていた。モローはこの書物もマザリナード文書として目録にのせている [1769]。
- 20) ちなみに、2010年夏にバリーで入手した15点のマザリナードは、2点が18世紀の仔牛革で一冊に製本され（400ユーロ）、13点が簡易製本で一冊に製本されており（600ユーロ）、合計で1,000ユーロほどであった。これらは特別に高価という文書ではなく、比較的容易に見つけられるものである。参考までに値段を記しておく。ここに記述している東京大学コレクションを日本政府が購入したときの値段は、1978年で40,500,000円であった。この価格には揃いのコレクションで、かつ美しい装丁の美術品的な価値も含まれると思われる。
- 21) 東京大学コレクションも購入時に「223（現実には225）点の、モローの目録に記載されていない文書が含まれる」ことが高く評価されたようである（東京大学図書館月報『図書館の窓』1979年7月号 pp.80-81）。この225点のほとんどはよく調べればモローに記載されている文書だが、中には貴重な文書も確かに含まれる。この調査結果については、前掲の学位取得論文第1巻巻末の「225点の文書の検証結果」に詳しく記述してある。
- 22) A-1-27 [2294]
- 23) A-1-28 [939]
- 24) A-1-29 [206]
- 25) A-1-30 [2270]
- 26) A-1-31 [207]
- 27) A-1-32 [208]

- 28) A-1-33 [936]
- 29) B-4-15 [856]。モローによればこの文書はマザリナードの収集家が切望する 8 つの文書の一つで、もっとも希少性が高いとしている。
- 30) Hubert Carrier, *op. cit.*, p.430.
- 31) B-5-11 マザリナードの表題はこのように長々としていることも多い。() 内に付してあるのは内容の見当がつく程度の意識である。
- 32) B-5-13
- 33) B-15-48
- 34) Eubel, Le P. Conrad, O.F.M., *Hierarchia catholica Medii et recentioris aevi sive Sumorum pontificum, S.R.E. cardinalium, ecclesiarum antistitum series : e documents Tabularit praesertim Vaticani collecta, digesta, edita / [opus initiatum a Conrad Eubel, O.F.M. conv. ; continuatum sub Ortae generalij]*, Padoue (Italie), 1952, 5^e volume (1667-1730). もうひとりのデュボワ枢機卿 Jean-Baptiste Dubois は枢機卿位 (1800-1846) であり、この後に述べるパリ警察長官の任期を考えるとやや時期が遅いように思われる。
- 35) 『パリ歴史事典』鹿島茂監訳、白水社、2000 年、p.189、190、219、598、603 (原著: Alfred Fiero, *Dictionnaire de Paris*, Paris, Robert Laffont, 1996)。
- 36) C-8-20 [2730] このタイトルの日本語訳はこの文書の内容に依拠している。書き手はこの文書自体をパスポート (この時代には手書きの書類) に見立て、マザランに渡して決別するのである。
- 37) スカロンの作品以前にも、「mazarinade」という単語は使われていたが、スカロンの『ラ・マザリナード』の出版により、「mazarinade」がひとつの政治的言説のジャンルとして独立していったと考えられる。語源と語義の変化については、前掲博士論文第 2 部第 4 章< mazarinade > 語義の変遷 pp.162-178. なお、『ラ・マザリナード』は再版が繰り返されたので、複数の版が存在する。東京大学コレクションには B-13-62、C-11-7、D-1-38 の 3 種類がある。モローの分類では [2436]。
- 38) ノーデはマザリナードに反駁するために文書を買集めたのだが、同時代人の知識人による批評として、貴重な意見を述べている。本論註 18 参照。
- 39) C-8-42 [56]
- 40) Hubert Carrier, *Les Muses guerrières. Les Mazarinades et la vie littéraire au milieu du XVIII^e siècle : courants, genres, culture populaire et savante à l'époque de la Fronde*, Paris, Klincksieck, 1996, pp.131-133.
- 41) そのうちのいくつかはコレクション C に入っている。*Les Heureux Convois arrivés à Paris ou le remède à la famine, en vers burlesques.* (C-4-32, [1633]), *Le Passetemps de Villejuif, en vers burlesques.* (C-8-21, [2731]), *Récit véritable de ce qui s'est passé aux barricades de l'année 1588, depuis le 7^e mai jusqu'au 1^{er} juin ensuivant, décrites en vers burlesques.* (C-8-41, [3009]), *Le Nocturne Enlèvement du Roi hors de Paris, fait par le cardinal Mazarin, la nuit des Rois, en vers burlesques.* (C-4-4, [2530]) などである。
- 42) Carrier, *Les Muses guerrières*, pp.108-147.
- 43) C-4-58 [2470]
- 44) Naudé, *op. cit.*, 2nde édition, p. 283.
- 45) Carrier, *Les Muses guerrières*, pp. 125-131. そのほかにも自称職業詩人でフロンド側から半コンデに鞍替えしたサン - ジュリアン、カトリック司祭で風刺の才に恵まれていたジャン - デュヴァル、大法官を父に持ち、9 編の反マザラン文書を残したラベ・ド・ラフマなどの作品もこのコレクションやそのほかの下位コレクションで読むことができる。
- 46) Carrier, *Les Muses guerrières*, p.503. さらに 2 点存在するが、いずれも個人の所蔵である。
- 47) D-2-25 Cf. Carrier, *La Conquête de l'opinion*, p. 468, note 430.
- 48) A-2-35、C-7-33 はモローの [1078]。パリで再版された 7 ページの文書である。
- 49) [3734] をのぞけば、これで代表作は全部そろった。[1813] (C-4-40, D-2-24), [3859] (E-44), [2245] (C-4-44). Cf. Carrier, *Les Muses guerrières*, p.93.
- 50) 以上、地方のマザリナードについては Carrier, *La Conquête de l'opinion*, pp. 460-464.

ENGLISH SUMMARY

Introduction to the Collection of the Mazarinades of the University of Tokyo before set up in an Online Database

Tadako ICHIMARU-REBOLLAR

With the support of a Governmental Grant (Kakenhi n° 22320066), the whole corpus of Mazarinades from the collection at the University of Tokyo will soon be available in a web site entitled “Projet Mazarinades, to built a new type of corpus and change the research environment”.

The Mazarinades consist of the numerous and various texts published during the Fronde, a Civil War in France that occurred in the middle of the 17th century. Considered today as a precious Corpus, both historically and literarily, the Mazarinades are relatively difficult to access, as they are dispersed worldwide and are often stored in restricted areas. From early 2011, however, computers and networks will permit the control and open access to a large number of the original documents. Prior to the opening of this online database, it is necessary to first evaluate the consistency of this corpus with respect to the historical relation with the Fronde, and concerning the origin of the corpus itself. This is particularly important for the collection of the University of Tokyo, which represents the core of the digitalized corpus we are promoting, as it has yet to be described until now. The philological analysis of the Mazarinades collection I am presenting here for the first time would not have been possible without the help and advice of Hubert Carrier, a Tours University Emeritus Professor who passed away in 2008, and was the first researcher to consider Mazarinades an independent research field.

Key words : mazarinades, online corpus, 17th century, la Fronde, Hubert Carrier.